

Ⅱ部問題

I. Ⅱ部制度—その改進

戦後は、表面的には「教育の機会均等」「勤労青年教育の充実」という筆名と、「昼間と夜間の教育を」というつたい文句に基づいて設立されました。しかし、そのほとんどが私立校であるといつた事実は、Ⅱ部—夜間工場や私立にとては、移動施設の効率的利用にならない、かつまたの「工業化・マスク化」の中で經濟的にも浮舟に見合づだけの利潤をえられるものであることを示している。またマルシニアシードによって、前後直後の資本主義復興という至上命令に沿った産業教育の振興と労働者の再教育のために、そして60年以後の高度経済成長—重化学工業の発展に沿った中高級労働力の需要に合つしのとしてⅡ部制度はあつた。

ところが、「たてまえ」的には戦後民主教育—学校教育法の理念のある意味では反映でとあつたであつうし、制度的・カリキュラム上は根本に至るまで工場と全く同じであつた。社会的には「感心な勤労学生」としてたてまつられ、とて切やされてきた。

しかし一方では、低賃金若年労働力の供給不足と支那労働力の大量産出を進行し、商業構造自体といわゆる「情報化」の中でサービス部門内を顕著してきた。そつい、たゞ時代の要請に答えるべく教審省の「十三の教育改革」に随分うるいみ、そこにはⅡ部はどう位置付けられていくのか。もう抜く軸は仰りとも「労働力の効率的整備・利用」である。これに基いて、社会的需要の変化—減少したⅡ部—学科の切り替て、「幼稚工場」「通信文書」などの充実・新設による「能力・資格」のみの育成科の設置を出してきている。また「Ⅱ部は勤労学生だけではない」というフレームアップを口実にして、より本質的にはⅡ部生を企画・実務担当の管理・監視にしほりつりようとする企業推進入學制の導入である。Ⅱ部のほとんどはとてて、たゞ「私大にあつても、Ⅱ部は『慢性的赤字』の主因となり」と言われているが、Ⅱ部はすでに前半にとてて投下価値の対象ではなくなりってきたのである。これらのが「矛盾」と「社会的要請」を解決せんとするのが私大Ⅱ部の統廃合—旧Ⅱ部へのⅡ部設置である。これいってと、「是」的にそのまま受けつくのではなく、進修指導や入試、企業推進などを活用して多くの労働者、学生として入学を断念させ、若年労働力の効率的利用に貢献することとするのである。

即ち事態を階級高級にと言える。現行定期制高級の後廃止あるいは普通科の廃止、そして企画内高級の設置を止められており、下車Ⅱ部以上に低賃金企画に専念するに集中していることをもえおは、この攻撃はすさまじいと! あると言えるだろう。

また日高による運動の癒合、同化攻撃がトフアである済生会教、猿大共農合の中下Ⅱ部が廃止されようとしていることである。さつなれば済生で労働者に支障への道は全く閉ざれてしまうことになるのである。

II. Ⅱ部の現状—Ⅱ部学生の苦悩と矛盾

まず何よりも指摘できるのは多要素な教育—厚生条件、複数である。例を上田義典ばく(地下と同じ)の例をとると、夜10時以後の所持ロックアウトは、ルーチン・自治活動を始めとして学生のあらゆる活動と存在制限—圧迫していく。逆面ではそれにも學生会館の全面ロックアウトが加わる。施設の面では、図書館は午時まで日射授業日は休館で会員のせりつけ、そのことから午後3時まで、該施設は上級と同額の学生創作組合費を払っているが、外門料は午後3時まで下島町は夜曲はやつない。他の例生協、入居食堂、床屋とされると、でも正規学生と接觸している。カリキュラムの面では、「昼間と夜間の教育を」とか「年間一日了解目」の形でみ縛縛といつて現われ、逆に、工部との兼任教育を多いためもあり裏に修業多く、時間はかなり「手詰ま」があると言われている。取扱課程や下車、地理の奥習とで多くにあります。理科教育実習の必要時間数が今の3倍になる動きがあり、全くⅡ部生に

教職の道を閉ざされ、さつとしている。

私場ではと見えは、「まじめな勤め学生」「苦學生」としてとてはやされる一方で、下と見えは種差なあれば申しあげなさうに下等に扱なければならず、社会保障・生活保障など基本的な権利さえもろくに奪われている。Ⅱ部学生の多くが借金の多い公務員やパート・臨時であるのは偶然ではない。裕福や自分の保障・社会保障が不安定にしかねらず、学生との両立のため、あるいは孫の面倒の負担にならぬように、奉公・正社員としての更なる努力の人としてパートを選ぶのである。

以上の別ほほんの一端にすぎないか、これだけを取ってみてといなにⅡ部学生を、差別・抑圧・不平等を蒙けているのか分る。しかしこの現実は現存の階級支配によるあらゆる差別・抑圧支配を支える構造の一翼なのである。「教育の機会均等」をとるえ「層間・固有度の教育を」といいつひと・アルミニアムはそれを實際には到底化することはできない。何故ならばそれを敵意化すれば、アルミニアム自体崩れてしまうのであり、差別・抑圧支配によつて一人一人を攻撃し、何重もの差別構造を作ることで現存の階級支配の柱なのである。

III. Ⅱ部学生の誇りを持った問いへ

現在のいわゆる「学歴社会」においては、Ⅱ部出身者の評価はよくいって「まじめ」で「世間を少しき知っている」学生であり、奥くなると「程度次々と落ちる工卒」ということになる。この現実を知っているからこそ大学当局は「卒業証書」には「Ⅱ部卒」なんて書かない。何故なき深い当直であつた！しかししてれどもつなるというのを、結局その事は、卒業後「正部卒」といつ事をもひた隨意にする者を生むであろうし、人を「バカ」にして行動なので。何故「Ⅱ部卒」で無いのか。当直の「あなた」はその問いに根柢的に答えるものでは決してなく、遂にⅡ部に対する差別・抑圧を肯定し固定化するものではないのである。

私は、Ⅱ部学生としての「誇り」を持ち続けるけはならないと思う。何とすれば「自己」行為でとなるれば「豊豪主シ」でない、自分の現実の立場を捨棄した斗いなど全くないとして抽象的などアレでしかない。またそれでは現実の大衆の姿など分らぬまい。

明大当局は毎年新入生を対象に生活実態調査を行つてゐるが、そこには次のよつた分析がある。まずⅡ部選択の理由として工部医的又約40%、経済的理由26%、勤務の都合24%である。また通学42%定職なししか58%であるが、往來の内約40%がアルバイトをするのが34%である。しかも45%の学生生活をカセぐためにタク、荷物労働等は約68%である。この数字を圍んで見ると、当直者のまつて工部へのマーレなきくな、といふ」という把柄は完全に捏ね、いふことは言えないようだと思ふ。しかしこの数字は重大な欠陥を持つてゐる。つまりこの現実は「選ばれた者」を対象にしていふ上で完全なⅡ部学生（簡略にいえばⅡ部を必要としている学生・労働者）の実態を把握していないのである。入試であるには必ず下切り捨てられに者ほどつなるのか。徳を含めた精査下なけれずⅡ部の現実など本音は少くはしないのだ。

また最近の傾向として、それと工部生敗者が減つてすんでいると言うが、同時に成績も低下してすんでいるとすわれている。成績低下自体、工部改廃の一つの根拠となつてゐるのであるが、この傾向は一時的と承認しているのみ。相論を含めて考えると、看護部など少「広さ」の、たことだけではなく、専門労働者（すなはち高時制高校生・高卒の労働者）の受講が導入されていることではなかろうか。高修まではすねをつけてⅡ部を受ける者より、働きながら運動勉強する者の多くが成績を悪いのは承認であり、彼らこそが入試によつてふり落とされていくのではなくだろうか。つまり工部自身「エリートコース」なのである。この現実、この事情こそ、私達が特有的な意味での「選ばれた者」ではなく、差別・分断支配の中で「選ばれた者」をして、そしてその現実をこそ変えていく者として踏んでいくつもりである。

豊豪主Ⅱ部の差別・抑圧・不平等を語ることは、しかしてそのみを語り、それだけを独自でアピールするのではない、先述したように、工部制度自身、資本主義社会における階級

支配の現実的実体である。大部- 教育の場にはⅡ部学生のみならず、障害者、在日朝中国人、女性、老人など多くの人々が排除され、差別- 抑圧- 不平等を受けている。Ⅱ部学生にとって劣悪な教育施設は、しかし障害者にとて、これは山以上に巨大な壁であり、地獄と言えるのではなかろうか。

これらを拈り出した考え方や斗争、差別- 不平等の放逐要求といつものまで政黨主義として切り捨てるが軽視してしまうのだと言える。多く1つは、Ⅱ部の差別- 不平等という結果の根源- 本質的矛盾にせまるのだとして、斗争を階級支配打倒のみに一括りしてしまう傾向である。この傾向の根りは、現実の1つ1つの矛盾への対応したまゝの階級支配打倒といつ鮮明- 従容線の場合、言い換えれば個別と一般の場合、あるいは個別の母での一般の慣習という概念が欠落しているのである。個々人自身、あるいは苦悩や痛みは逐一個別化してあげられるものではない。

私直にⅡ部- その差別- 不平等という現実に立たれるのは、あくまで自らの立場を堅持せんとするからであり、私直に想い、其有しようとする大衆の利害の所在を具体的に明らかにしなければならないからである。Ⅱ部学生のみならずⅡ部学生にと見られる同化主義、大同団結主義は、このことをⅡ部の後退化- 容認と受け入れたり、「学生」であることを抽象的に行なうべきだと思えられないものである。私直は、Ⅱ部と私にて「必要更」であらじ現状の資本主義体制下でなければならぬからである。Ⅱ部学生大衆の現実を把握することこそまず小説的な傾向を生んでしまうのである。私直は、Ⅱ部学生の利害の防衛ということを次々とけてこそ、大衆と同じ位置に立てるのだし、その立場の堅持こそが、『堅粕れかね』であるといつより強烈な今が支配を断ち切り、あらゆる差別- 抑圧工れてゐる大衆との連帯の輪を持ちえたのだと言える。

73. 4.